

## 近代東京における旧福山藩士族のファミリーヒストリー分析：明治期の新聞と昨今のデータベースから紡ぐ江木高遠・保男兄弟の生涯

鷲崎，俊太郎  
九州大学大学院経済学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/4743323>

---

出版情報：経済學研究. 88 (4), pp.19-44, 2021-12-25. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

# 近代東京における旧福山藩士族のファミリーヒストリー分析 —— 明治期の新聞と昨今のデータベースから紡ぐ江木高遠・保男兄弟の生涯 ——

鷺 崎 俊 太 郎

## はじめに

本稿の目的は、明治の東京に在住した士族の江木高遠・保男<sup>たかとお やすお</sup>に関して、先行研究や新資料、昨今のデータベースからの事実を時系列で再編し、その人生の意義を再検討する点にある。

江木家の人々を調べる契機は、目下分析中にある三菱合資会社の麴町区内幸町所有地において、明治・大正期の借地人に江木保男・定男の名前があった点に由来する。不勉強の私は、それまでこの父子を知らなかったために、どういう経緯でこの土地を賃借したのか、そのために江木家の本業を明らかにしようと思った。そこにもう一つ、江木家への興味が舞い込んだ。江木定男の妻が、日本画家・鏑木清方の代表作「築地明石町」のモデル・江木ませ子だったのである（以下、江木家系図は図1を参照）。わが家では、私の幼少期に母の趣味で「築地明石町」のポスターが長年飾られていたので、ませ子は私にとって非常になじみ深い女性だった。こうした私的な動機から江木家の史実を発掘してみると、保男と兄・高遠、2人の父・鰐水<sup>がくすい</sup>に関する研究が、幅広い分野にわたって洗い出された。しかし、それらの先行研究は、一つとして高遠や保男の人生を包括的に分析したものでなかった。そういう意味で、本稿は元々、内幸町の不動産経営史という本編のスピノフにすぎなかったのだが、彼らの功績の看過しがたい重要性に惹かれて、先にその封を切った次第である。

こうした研究動機に基づいて、先行研究の到達点と課題をまとめてみよう。まず、江木家の祖・鰐水（1810～81年）に関しては、その関係史料が1929（昭和4）年に曾孫の文彦（定男とませ子の長男）から東京大学史料編纂所へ寄贈され、『江木鰐水日記』上下2巻が刊行された<sup>1)</sup>。この日記は、家族・親戚のイベントに関する情報を豊富に含むため、ファミリーヒストリーの構築に好都合な史料である。また鰐水は、明治維新を迎えて出身地の旧福山藩領の殖産興業政策に独自の積極的な意見を提唱したことで、地方史でも高く評価される<sup>2)</sup>。しかし、これだけの情報を残したにも拘わらず、子息との関係は、わずかに三宅雪嶺が鰐水の紹介をする際、高遠の業績にも触れたにすぎない<sup>3)</sup>。

次に、江木高遠（1849～80年）に関しては、明治初期における日本人留学生の一人として<sup>4)</sup>、自由

1) 東京大学史料編纂所編 [1956ab]。

2) 広島県編 [1984]。

3) 三宅 [1950]。

4) 西澤 [1997]；塩崎 [2007ab]；同 [2008]。

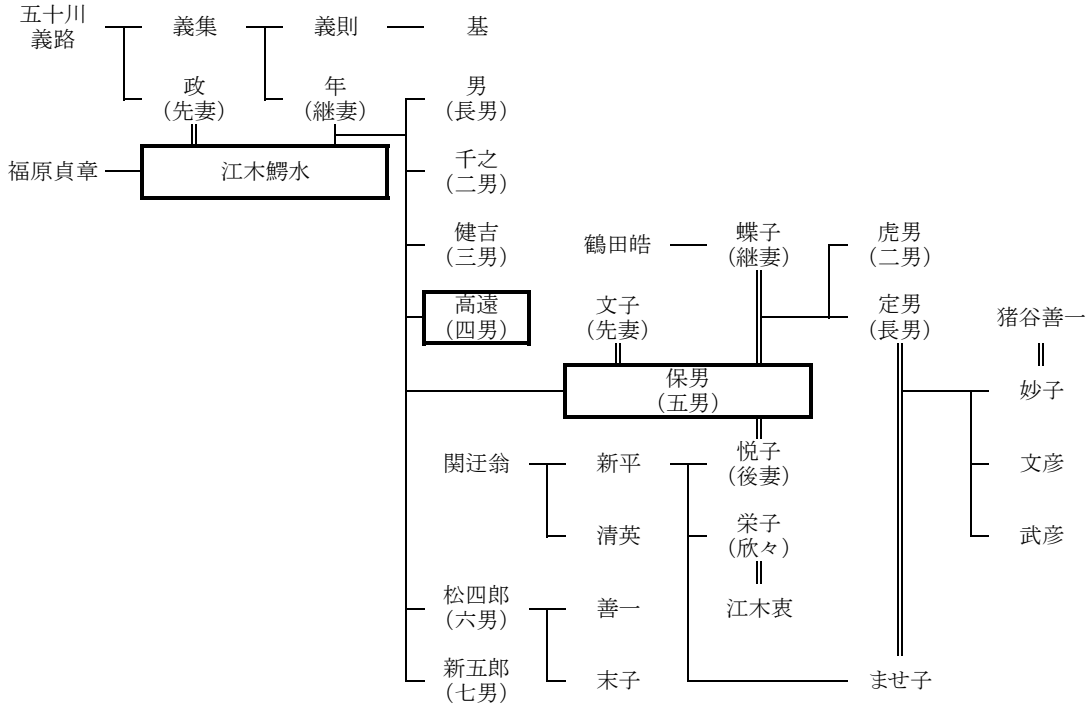


図1 江木家・五十川家系図

出典：東京大学史料編纂所編 [1956b]、331-337頁；富岡 [2000]、25頁；『人事興信録』データベース。

民権運動の時代に開催された演説会の企画者として<sup>5)</sup>、専修学校（現・専修大学）設立に向けた日本法律会社の一社員として<sup>6)</sup>、研究が蓄積されてきた。それぞれの研究は、それぞれの分野で事実を深く掘り下げてきたものの、高遠の実績をその枠内に押しとどめているため、彼の留学経験、演説会活動、専修学校設立の3点がどういう関係性を示しているのか、明らかではない。さらに、高遠の死因についても、評価が二分している<sup>7)</sup>。このように、先行研究では断片的な解釈に留まった高遠の生涯を通時的に俯瞰し直し、その役割を包括的に評価することが、本稿の第一目的となる。

こうした断片的な解釈は、弟の江木保男（1854～98年）にも該当する。たとえば、講談社の『日本人名大辞典』（2001年）は保男を「写真技術者」と紹介するが、保男は創業者であっても技術者ではない。その半生は「外遊して舶来産業の移植に努めた企業家<sup>8)</sup>」と言われるが、その具体像には迫られていない。近年、丑木幸男や木山実が、草創期の三井物産ミラノ出張店の支配人だった保男を語るが<sup>9)</sup>、なぜ彼が渡欧し、外国語を使いこなせたのかは言及していない。保男の写真店主としての業績は、社史やその後経営を継承した五十嵐与七の伝記で語られているが、それ以前の保男の経緯は、存命中に

5) 松崎 [1998]。  
 6) 専修大学編 [1981]。  
 7) 三宅 [1950]；専修大学編 [1981]；山口 [1982]。  
 8) 富岡 [2000]、29頁。  
 9) 丑木 [1999]；木山 [2009]。

発行された偉人伝に留まる<sup>10)</sup>。そこで、第二の目的として、保男の人生についても事実関係を時系列で編集し直すとともに、当時の新聞各紙の記事から「洋行博士」と呼ばれた保男の商業的役割を評価してみたい。

## 1. 江木鰐水

江木鰐水（名は繁太郎）は、1810（文化7）年12月、安芸国豊田郡戸野村（現・広島県東広島市河内町戸野・同市福富町上戸野）の庄屋・福原貞章の三男として生まれた<sup>11)</sup>。1823（文政6）年に五十川義路の子義集から医術を学び、のちにその親戚だった江木家を継いだ。

1830（天保元）年から京都へ遊学し、頼山陽の門下となって儒学を修めた。32年の山陽死後は、大坂で篠崎小竹、続いて江戸で古賀精里の三男・侗庵にそれぞれ儒学を学んだ。37年に福山へ戻ると、五人扶持で福山藩に登用され、藩校弘道館の講書を命じられた。39年には福山藩主阿部正弘の学制・軍制改革に参画し、41年には儒官として十人扶持となる。ペリー来航時の1853（嘉永6）年には江戸に在勤しており、翌年の再来航時には、横浜へ赴いてペリーとの応接を視察し、蒸気機関車の模型を見ている。同年福山へ帰ると、正弘が弘道館を発展的に解消して新たに建設した藩校・誠之館で、子弟の教育にあたった。1868（明治元）年の戊辰戦争では軍事参謀に任じられ、藩兵とともに箱館・青森へ遠征した。

71年の廃藩置県後、鰐水は士族授産のため、養蚕・製糸業の興隆に尽瘁し、府中と福山・鞆を結ぶ芦田川の水運計画に意見を述べたり、士族層の指導者養成を目的とした教育を立案したりするなどの活躍をした。鰐水には7人の子供があり、長男は夭折、次男も5歳で亡くなるが、三男・健吉、四男・高遠、五男・保男、六男・松四郎、七男・新五郎と続いた。

## 2. 江木高遠

### (1) ニューヨークへの2度の留学

江木高遠は、1849（嘉永2）年12月に鰐水の四男として生まれた（図2）。兄の健吉（鰐水の三男）が江木家の家督を継いでいたので、高遠自身は外曾祖母方である高戸家の養子となって賞士（通称・賞一郎）と称していたが、のちに江木家に復帰して後を継いだ。

高遠は、福山藩校の誠之館で学び、68年には健吉と兄弟で長崎へ遊学し、オランダ改革派教会の宣教師フルベッキに学んだ<sup>12)</sup>。翌69年、福山藩の貢進生として東京へ遊学し、開成学校、のち大学南校に学び、その寄宿生となった<sup>13)</sup>。70年7月、華頂宮博経親王<sup>14)</sup>が皇族初の海外留学を行う際には、高遠がその随行者に選ばれて<sup>15)</sup> 従兄の五十川基<sup>16)</sup>とともに渡米し、11月からニューヨーク州ブルックリ

10) 瀬川 [1893]；布川 [1966]；江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会編 [1985]。

11) 以降、江木家の生没年月は、東京大学史料編纂所編 [1956b]、331-332頁を参照。また鰐水の略歴は、同書、320-330頁に加え、干河岸編 [1900]、521-527頁；広島県編 [1984]、725、1087-1088、1196-1197、1272頁を参考にした。



図2 江木高遠肖像

出典：専修大学編 [1981]、102頁  
 (原資料：江木文彦氏所蔵)。

ンにある Brooklyn Polytechnic Institute (BPI) に入学した。フルベッキが、華頂宮や高遠たち留学生の紹介状を、オランダ改革派協会ミッション本部総主事の J.M. フェリス宛に作成していたので<sup>17)</sup>、フェリスが BPI の校長や関係者に華頂宮一行を紹介したと推測される。

この留学内容は近年、塩崎智によって具体的な事実が明らかにされている<sup>18)</sup>。BPI は1855年に開校した8学年制の私立男子校で、最初の4学年を Academic Department、あとの4学年を Collegiate Department と分けていた<sup>19)</sup>。ただ、日本人は全員、最初の2年間を Special Students として、正式な入学前レベルの個人授業を受講し、専任教師に付いて各自の能力に合わせた学習を行った。高遠は、留学開始後4か月にして、Academic の学習内容を半分以上習い終わり、科目によっては最終学年の内容を学んでいた。年度末の卒業式にも日本人留学生たちは在校生として参列し、卒業生が

英語で演説すると、誰よりも集中して式辞に耳を傾けていたと、地元紙が報じた。こうした機会が、高遠をして演説の魅力に取りつかせたと考えられる。72年1月に地元紙が BPI の日本人留学生を取材した際、高遠はその記者のインタビューに英語で応じた。記者が高遠へ渡米の理由と勉強内容を尋ねると、高遠は米国の礼儀、習慣、言語、法の知識獲得のために米国へ来て、とくに国際法を専門に勉強していると、具体的に返答している。

72年3月からは、岩倉遣外使節団に同行してコネチカット州で留学していた奥平昌邁<sup>20)</sup>と小幡甚三郎<sup>21)</sup>が、高遠ら日本人留学生の助言を受けて、BPI に入学した。その後、甚三郎が精神的な病に伏

12) フルベッキは、1830年オランダに生まれ、52年に渡米後、オランダ改革派教会海外伝導局の宣教師として1859(安政6)年に来日。長崎で布教の傍ら、済美館(後述)と佐賀藩が長崎に設けた致遠館に招かれ、英語、政治、経済、理学などを教えた。69年、新政府の顧問として東京へ招聘され、開成学校の語学・学術教師、大学南校教頭、正院の翻訳局、左院、元老院などに仕出した。梅溪 [1965]、70-77頁；東京大学百年史編集委員会編 [1984]、186-187頁。

13) 健吉も貢進生に選ばれて上京を予定していたが、発病のために福山へ戻り、71年11月17日に26歳で没した。東京大学史料編纂所編 [1956b]、79、81頁。

14) 華頂宮博経親王は、伏見宮邦家親王の第12王子。1860(万延元)年8月に孝明天皇の養子となったので、明治天皇と兄弟関係に相当する。留学時は、東隆彦と名乗った。塩崎 [2007b]、130-131頁。

15) 「職務進退・元老院 勅委任官履歴原書 転免病死ノ部」(国立公文書館蔵、請求番号：職00148100-089)；東京大学史料編纂所編 [1956b]、2-3頁。

16) 1844(弘化元)年、福山藩士五十川義則の長男として生まれる。鰥水の妻の甥にあたる。秀才の誉れ高く、福山藩の医学学校兼病院の設立にも尽力した。留学時の「東洋紀行」は、江木鰥水関係資料に残されている。広島県編 [1976]、79-80、612-619頁。

17) 高山編訳 [1978]、197頁。

18) 華頂宮一行の BPI 留学の様子は、塩崎 [2007ab]、同 [2008] を参照。

19) BPI の Collegiate で1、2年間学んだのち、ハーバード、イェール、プリンストンなどの大学に進学する者もいた。塩崎 [2007a]、128頁。Collegiate Department は、現在の NYU Tandon School of Engineering に繋がる。NYU Tandon School of Engineering Web Site, Our History (<https://engineering.nyu.edu/about/history>)。

20) 奥平家中津藩9代藩主で、1868(明治元)年に家督を相続した。69年の版籍奉還で中津藩知事に着任するが、71年1月東京に移住し、勉学に励んだ。同年7月の廢藩置県で免職したため、米国への留学が実現した。山崎 [1981]、370頁；黒屋 [1987]、422-423頁。



してしまうが、高遠は甚三郎を終始看病して最期（1873（明治6）年1月29日）を看取り、その後の奥平昌邁の世話役をも、高遠が甚三郎に代わって務めた。

高遠は、米国での甚三郎の様子を鰐水に手紙で伝えていた。この頃、五十川基が肺結核に罹って72年10月にニューヨークから単身帰国して東京で療養していたために、鰐水は73年2月福山から東京を訪問し、神田に滞在していた<sup>22)</sup>。4月2日、甚三郎の訃報に接した兄・小幡篤次郎は、鰐水の滞在先を訪ねている。鰐水が篤次郎に見せた手紙には、甚三郎が米国で神経病を患っているが、大病ではないと書かれていたが、同日の午後、奥平と高遠から届いた書翰には、正月以来甚三郎が発狂して不眠に陥ってしまい、高遠がつききりの看護をしたにも拘わらず、遂に死亡したという訃音が書かれていた。4月7日には鰐水が三田の小幡篤次郎宅を弔問し、5月10日に福山へ帰る際、三田に立ち寄って福沢諭吉を訪ねている<sup>23)</sup>。小幡や福沢は、献身的な高遠に対する恩義を感じていたはずだろうし、高遠も、甚三郎との出会いを機に、篤次郎と福沢を深く知るようになったとみられている<sup>24)</sup>。

高遠は Special Students の2年間を修了したのち、72年9月からは Collegiate Department に進学し、高等教育を行う Liberal Course に所属した。しかし、華頂宮が73年8月病気になったために、高遠も華頂宮と一緒にやむなく日本へ帰国した<sup>25)</sup>。その後、華頂宮、奥平、福沢・小幡からの資金援助<sup>26)</sup>で74年6月に再渡米し、BPIの Collegiate に復学後、さらにコロンビア法律学校（現・コロンビア大学）に進学した。75年、1学年下に入学した相馬永胤<sup>27)</sup>、鳩山和夫<sup>28)</sup>、目賀田種太郎<sup>29)</sup>らと懇意になり、12月には彼らと日本法律会社という法律クラブを結成した<sup>30)</sup>。このクラブでは、社員が相互に協力しあって法律の研究を進めていった。76年5月、高遠はコロンビア法律学校を219人中次席で卒業し、法律学士を取得した<sup>31)</sup>。高遠の卒業・帰国にあたって、日本法律会社のメンバーが、「中食送別会」を開き、その場でクラブの憲法を議定した。この憲法では、法律の実用的・実践的な研究を会社の目的とし、それを達成するために、法律に関する事業が計画された。その1つが「法律学校の設立」で、高遠は帰国後、日本法律会社の支会を東京に作りつつ、法律学校の設立をめぐる、在米中の相馬とやり取りを重ねた<sup>32)</sup>。

21) 小幡甚三郎の一生は、西澤 [1997] に詳しい。

22) 五十川基は、73年2月22日に30歳で死去した。東京大学史料編纂所編 [1956b]、334頁。

23) 東京大学史料編纂所編 [1956b]、113、117頁；西澤 [1997]、151頁。

24) 松崎 [1998]、547頁。

25) 東京大学史料編纂所編 [1956b]、190、204頁。

26) 福沢から高遠の資金借用に関しては、松崎 [1998]、547、556頁を参照。

27) 1871年に彦根藩費留学生として渡米、73年12月文部省から留学生の一斉帰国命令が出てやむなく帰国したが、旧彦根藩主からの義務金が出て再度留学し、75年10月にコロンビア法律学校に進学した。77年に同校卒業後、エール大学大学院で法律・経済を学び、79年9月に帰国した。専修大学編 [1981]、8-24頁。

28) のちに東京専門学校（現・早稲田大学）校長および衆議院議長となる。鳩山の留学日記によると、高遠が初めて登場するのは75年9月3日である。鳩山編 [1929]、442頁。

29) 1870年4月に静岡藩命で大学南校に入学、同年9月大学南校の国費留学生としてアメリカへ留学、72年9月ハーバード法律学校（現・ハーバード大学）へ入学、74年6月卒業する。帰国後は文部省に勤務し、75年7月に鳩山たち留学生の監督となって再渡米した際、相馬たちと親しくなった。専修大学編 [1981]、38-47頁。

30) 鳩山の留学日記によると、75年12月14日には、「力を共にして、組合を組織し、目的を一にして、日本の憲法を樹て、法律を明らかにし、人民をしてその権を知らしめ、その権を伸張する方法を得せしめんことを、同志江木、相馬の両君と誓約す」とある。鳩山編 [1929]、448-449頁。

31) 東京大学史料編纂所編 [1956b]、301-302頁。

## (2) 留学帰国後の活動

1876年5月に日本へ帰国してからの高遠には、主として3つの活動—官職への奉仕、演説者としての講談会の企画、法律学校の設立運動がみられた。

### 1) 官職への奉仕

第1に、官職への奉仕について、高遠は77年2月に東京英語学校英語教員の雇として採用され、同年4月から後身の東京大学予備門正科教員へ雇われている<sup>33)</sup>。正科教員は教職雇員のひとつで、予備門の必要に応じて雇い入れられたポストだった。そのため、正科教員には、官等給に準じて所定の給料が支払われる教員職とは異なり、その人物に見合った額の給料が支払われていた<sup>34)</sup>。予備門在職中は経済学と史学の教鞭をとったが<sup>35)</sup>、翌78年12月に依願退職して官界へ進出し、元老院の準奏任御用掛に採用された<sup>36)</sup>。御用掛では、第二課翻訳係と訴訟法取調委員局掛を兼務していた<sup>37)</sup>。元老院側は高遠の法学知識をいっそう活用させるため<sup>38)</sup>、79年5月1日、高遠を権大書記官に任命した。さらに、12月には正六位が叙され、翌80年1月には、外務一等書記官に任じられた。雇の英語教員から元老院の官職、さらに外務一等書記官への抜擢は異例だっただけに、このように昇進した背景を、次の講談会（演説会）活動とあわせて検討してみよう。

### 2) 講談会の主事と演説活動

帰国後の高遠の主な活動の第2は、雄弁な演説者として知名度を上げるとともに、演説活動の場となる講談会を企画した点にある。ここでは、松崎欣一の研究に依拠しつつ、そこで割愛された箇所を補筆したい。

高遠帰国の76年から再渡米の80年まで、高遠を軸にしたと推定される一群の知識人たちが、講談会を断続的に組織していた。この名前は開催時期で異なり、77年1月から9月には「鎗屋町講談会」、78年9月から79年半ばまでは「江木学校講談会」、79年10月から80年4月までは「講談会社講談会」と名乗っていた<sup>39)</sup>。高遠の官職履歴と比較すると、「鎗屋町講談会」は東京英語学校の雇教員と東京大学予備門正科教員の前半期に、「江木学校講談会」は予備門正科教員の後半期から元老院御用掛の時期、「講談会社講談会」は元老院権大書記官から外務一等書記官の時期と、おおよそ重複する。

32) 専修大学編 [1981]、68-72、96頁。

33) 「職務進退・元老院 勅奏任官履歴原書」転免病死ノ部（国立公文書館蔵、請求番号：職00148100-089）。東京大学予備門は、77年4月、東京大学の設立に伴って官立東京英語学校と東京開成学校普通科（予科）を合併する形で創設された。東京大学百年史編集委員会編 [1984]、551頁。

34) 東京大学百年史編集委員会編 [1984]、560頁。

35) 『東京大学法理文三学部年報 第6年報』明治10年9月—同11年8月所収の「東京大学予備門職員教員明細表」。この年度の担当教員に、外山正一と井上良一（ともに英語）、菊池大麓（数学）、山川健次郎（物理学）がいた。

36) 「職務進退・元老院 勅奏任官履歴原書」転免病死ノ部（国立公文書館蔵、請求番号：職00148100-089）。

37) 「職務進退・元老院（奏任以上）進退上申録」広島県士族江木高遠奏任御用掛へ採用ノ件（国立公文書館蔵、請求番号：職00139100-019）。

38) 専修大学編 [1981]、100頁。

39) 松崎 [1998]、540-541頁。

鎗屋町は、現在の銀座3～4丁目3番付近にあった地名である。そこで毎週水曜日午後7時に演説会を予定したために、この演説会は「鎗屋町講談会」と呼ばれた。76年10月18日の各新聞には、福沢諭吉、小幡篤次郎、江木高遠、井上良一、矢野文雄（龍溪）という5名の演説の有料公開が告知された。『江木鰐水日記』では、この告知が同日の『朝野新聞』に載ったと伝えるが<sup>40)</sup>、『郵便報知新聞』、『読売新聞』、『東京日日新聞』にも掲載されている<sup>41)</sup>。とくに、『郵便報知新聞』は、73年の民選議院設立建白書の提出報道以来、急進主義の論調を支持する「民権新聞」としての地位を確立していた。旧幕臣の要職を務めながらも官職に就かなかった栗本鋤雲<sup>じょうん</sup>が報知社に招聘され、その栗本から福沢を通じて、のちに入社する藤田茂吉、箕浦勝人が続々と論文を投稿したことで、進歩的で反政府色を帯びていった。77年には慶応義塾出身の矢野文雄が最高幹部として入社し、翌78年に『郵便報知新聞』が大隈重信と提携すると、民衆の政治思想を煽動する役割を果たした<sup>42)</sup>。

松崎は、上記3つの講談会の構成員を表にまとめ、このうち「鎗屋町講談会の構成は福沢及び慶応義塾を核とした結びつき」としながらも、実際には高遠が講談会を取り仕切っていたことから、高遠と井上から講談会開催を福沢に働きかけ、福沢がこれを受けて、小幡・矢野を加えて開催に至ったのではないかと位置づけている<sup>43)</sup>。井上はハーバード法律学校を卒業後、75年東京英語学校へ雇われ、翌年に東京開成学校教授補を兼任、さらに77年には東京大学法学部唯一の日本人教授として、英国法律を担当する実力を備えていた<sup>44)</sup>。また、井上は予備門で英語教員を兼任していたので、高遠との面識も深かった。

井上・高遠・福沢の3人には、さらに2つのエピソードが知られている。ひとつは、目賀田らが米国留学ないし遊学経験者を中心とした新時代の知識人たち向けに組織した団体「人力社」に、3人とも加わっていたことであり、いまひとつは、福沢が令息一太郎、捨次郎の教育を、高遠と井上に託すべく、高遠の住居近くに一軒の家を構える計画を立てていた点である<sup>45)</sup>。さらに井上は、高遠たち日本法律会社の在東京メンバーの推挙によって、会社への加入を承認されていた<sup>46)</sup>。このように、高遠と井上は、留学・洋行経験を持ち、英米の法律事情に明るく、また弁が立つという点では、まさに福沢好みの新進気鋭な法学者だったといえる。また、高遠も、井上のような東京大学関係者を、慶応義塾や日本法律会社の同志的結合で紹介できた手応えを感じたはずである。

「鎗屋町講談会」が消滅した77年10月から、次の「江木学校講談会」が開始される78年9月までの期間は、高遠主催の講談会活動の端境期にあたるが、その間の77年11月2日には東京大学で演説会が開催されている。この演説会では、高遠、矢野、福地源一郎の3人が出席し、およそ800人の聴衆が集

40) 東京大学史料編纂所編 [1956b]、301頁。

41) 『郵便報知新聞』、1876年10月18日、2、4頁；『読売新聞』、1876年10月18日、2頁；『東京日日新聞』、1876年10月18日、2頁。

42) 報知新聞社 [1941]、7-9、16-19頁。

43) 松崎 [1998]、541、545、553頁。

44) 井上は、明治12年1月29日死去した。「太政類典」第8巻（自明治11年至明治12年）第3編官規・賞典恩典3、故東京大学教授井上良一へ追賞金下賜（国立公文書館蔵、請求番号：太00612100）；東京大学百年史編集委員会編 [1984]、340頁。

45) 松崎 [1998]、547-550頁。

46) 専修大学編 [1981]、100頁。



まった<sup>47)</sup>。高遠自身が予備門の正科教員として雇用されていたからこそ、学内で大規模演説会の開催が可能だったと思われる。こうした東京大学での職歴は、次の「江木学校講談会」にも活かされていた。

78年9月からの「江木学校講談会」は、場所を東両国の中村楼や、浅草須賀町の<sup>いぶむらろう</sup>井生村楼に移して開催された。とくに、翌79年4月12日の講談会は、父・鰐水の古稀祝を兼ね<sup>48)</sup>、モース<sup>49)</sup>とユーイング<sup>50)</sup>の講演がなされ、菊池大麓がそれらを通訳した。こうした顔ぶれを見ても、「江木学校講談会」の東京大学関係者への接近が伺える。

講談終了後は、井生村楼の2階で鰐水古稀の寿宴が開催された。この参加者には、当代の多数のジャーナリスト——前述した『郵便報知新聞』の栗本・藤田のほか、『朝野新聞』の成島柳北・末広鉄腸、『読売新聞』の加藤九郎らが含まれていた。また、吉田清成、<sup>かわづすけゆき</sup>河津祐之といった官僚も参加していた。駐米公使の吉田と高遠の関係は米国留学中に築かれており<sup>51)</sup>、外務一等書記官就任時には直接の上司—部下という関係になる。また、河津は75年6月から元老院書記官、78年12月には大書記官に就いていた<sup>52)</sup>。鰐水古稀の寿宴が催された79年4月の高遠は元老院御用掛を務めており、翌月には元老院権大書記官に任じられる。高遠にとっては、立身出世のかかった時期でもあるだけに、官僚もまた、同じ官職に身を転じた高遠の法学知識に期待したに相違ない。このように、「江木学校講談会」は、高遠の東京大学予備門と元老院でのキャリアに応じて、東京大学関係者や官僚・ジャーナリストの人脈を活用させながら、民衆へ洋学を啓蒙させる機能を果たしていた。

79年7月からは、3つ目の講談会組織である講談会社の発会を告知している。9月2日の「講談会社公告」を見ると、高遠と菊池大麓が講談会社の幹事を務め、社員としてその2人を含む15人が名を連ねていた（残り13人は、西周、外山正一、小幡篤次郎、<sup>ぬまもりかず</sup>沼間守一、加藤弘之、河津祐之、中村正直、フェノロサ<sup>53)</sup>、藤田茂吉、佐藤進、メンデンホール、モース、杉亨二<sup>54)</sup>）。また、同月21日の講談会社講談会には、社員の出席者として上記15人のうち10人（外山、高遠、加藤、西、杉、沼間、河津、菊池、モース、藤田）と福沢諭吉の出席が予定されていた<sup>55)</sup>。この顔ぶれで注目されるのは、基本的に、これまで培ってきた慶応義塾・東京大学・官僚のネットワークを維持しつつ、明六社関係の人物（福

47) 『読売新聞』、1877年11月6日、2頁。

48) 1877年1月、鰐水は六男・松四郎らとともに、東京に移住していた。東京大学史料編纂所編 [1956b]、330頁。喜寿祝の内容は、『読売新聞』、1879年4月15日、2頁に拠る。

49) モースは、1877年7月～79年8月に東京大学理学部で動物学を教授していた。高遠主催の講談会のメンバーだった点には、モース [1971]、227-231頁にも記録されている。

50) ユーイングは1878年10月～83年6月に東京大学理学部教授として来日し、蘇言機（蓄音機）の製作技術を紹介した。東京大学百年史編集委員会編 [1987]、337-338頁。

51) 京都大学文学部国史研究室編 [1993]、167頁。この高遠から吉田清成に宛てた書翰は年代不明とあるが、「小生儀も、今五月始旬頃は、当法律学校卒業いたし候筈御坐候間、多分六七月頃には帰朝可仕心算罷在候」という文章から、1876（明治9）年と推察される。

52) 磯ヶ谷 [1927]、827頁。

53) 高遠の予備門教員辞職を受けて、フェノロサが理財学を、高橋是清が史学を担当した。高橋は、井上良一死去後の英語も担当した。『東京大学法理文三学部年報 第7年報』明治11年9月～同12年8月所収の「東京大学予備門職員教員明細表」。

54) 『読売新聞』、1879年9月2日、4頁。

55) 『郵便報知新聞』、1879年9月20日、3頁。

沢をはじめ、西、加藤、中村、杉)が高遠の講談会社に合流していた点である<sup>56)</sup>。明六社自体は創立後まもなく自然解散したが、本来その目的の1つだった「新聞広告等で広く聴講者を募る公開の講演会<sup>57)</sup>」の定期開催は、高遠の講談会社に継承されたとはいえる。

もう一つ興味深いのは、沼間守一の参加である。沼間は、元老院大書記官の地位にあったが、法律講義会(のち嚶鳴社)という民衆に法律思想を啓蒙し、演説・討論会実行の先駆となる会を立ち上げ、79年8月自由民権運動に専念するために辞官した。そして、11月『横浜毎日新聞』を買収して東京に移し、『東京横浜毎日新聞』と改題して社長になっていた<sup>58)</sup>。沼間は、元老院に在籍しながら、弁舌の重要性を痛感し、演説・講談に情熱を注いでいた点で、高遠へ大きな共感を覚えたに相違ない。

「講談会社公告」掲載と同じ9月2日には、社交クラブとして設立に向けられた交詢社の第1回準備会が開催された。この日集会した31人は、高遠を除くと、全員慶応義塾の卒業生だった。高遠は翌月、小幡篤次郎、小泉信吉、荘田平五郎、早矢仕有のとともに、交詢社の創立事務委員に選出され、翌80年1月の交詢社発会式では常議員24人の1人に選出されている。こうした多彩な顔ぶれの人選は、福沢の交友範囲の広さを示すものと言われているが<sup>59)</sup>、それは高遠側から見ても、慶応義塾の門下生と同様の知遇を福沢から得られていたことになるし、留学帰国後の講談活動で構築された人的ネットワークが結実した瞬間でもあった。

### 3) 法律学校の設立に向けた尽力

高遠帰国後の第3の活動は、日本法律会社メンバーによる法律学校の設立にあった。帰国後の高遠が、日本法律会社の支会を東京に作り、学校設立をめぐる、在米中の相馬とやり取りを重ねていたのは、先述したとおりである。そこへ、相馬と目賀田が79年9月に米国から帰国してきた。同月19日には早速、日本法律会社の年次大会が東京で開かれ、高遠は会長に選ばれている。さらに12月、既に元老院権大書記官に任用されていた高遠が相馬にも元老院入りを薦め、相馬はそれを受け入れて、翌80年1月に元老院へ就職している<sup>60)</sup>。

高遠は、80年1月7日に外務一等書記官に任じられた。ここが、高遠の人生の岐路となった。高遠は米国ワシントンの日本公使館へ赴任することが決まったので、1月20日、講談会社幹事を菊池大麓と金子堅太郎へ託して社務を担当させ、また相馬、目賀田、津田純一、田尻稲次郎の4人を講談会社社員に加入させている<sup>61)</sup>。高遠が講談会社を彼らに委ねた意味は、留学帰国後に構築した慶応義塾関係者と東京大学関係者を主とするネットワークに、日本法律学校・専修学校設立メンバーに融合させ、

56) 加藤弘之は、77年2月から東京開成学校総理の地位にあり、同年4月から東京大学法理文三学部総理に任命されている。東京大学百年史編集委員会編 [1984]、426頁。

57) 東京大学百年史編集委員会編 [1984]、615頁。

58) 矢野代表 [1979]、417、419頁。

59) 交詢社編 [1983]、16-17、42、52、61-62頁。

60) 相馬は、本官でなく、雇としての採用。元老院は、相馬の期待に反したので、相馬は目賀田とともに、司法省附属代言人となった。専修大学編 [1981]、106-108、115-116頁。

61) 『郵便報知新聞』、1880年1月20日、2頁。田尻は、相馬・目賀田とともに専修学校創立者の1人に数えられる。津田は、日本法律会社のメンバーとして、相馬・目賀田・鳩山・高遠らと進行を重ね、78年に米国留学から帰国すると、高遠とともに専修学校の設立に奔走した。専修大学編 [1981]、93-95頁。

近代欧米の法制度や社会経済システムに明るい専門家や啓蒙活動家を融合させようとした点にあったといえよう<sup>62)</sup>。前年11月、相馬・目賀田・田尻・津田たちが法律学校の設立に向けて、福沢の支援を得て慶応義塾の夜間法律科を開設できていた点が、日本法律学校関係者と慶応義塾関係者との融合を図るのに大いに役立っていたとも考えられる<sup>63)</sup>。

### (3) 高遠と鰐水の最期

高遠は交詢社の常議員も辞任して、3月8日に渡米赴任したが、3か月後の6月6日、かつて留学していたニューヨークでピストル自殺した。享年32歳だった。自殺の原因は明らかにはされていないが、三宅雪嶺の高遠評には、「官職を利用し、多く美術品を無賃にて携帯し、税管理の指摘する所となり、公使吉田に追究され、遂に短銃にて自殺す<sup>64)</sup>」とある。これを受けて、山口静一や松崎欣一は、「江木が外交官特権を利用してアメリカの友人のために陶磁器その他の工芸品を無関税で持ち込んだことが、在米の日本人業者に糾弾された結果<sup>65)</sup>」であり、「おそらくは親しい友人のための個人的な美術品の持込みというほどのことであつたのだが、それが当時アメリカにひしめいていた日本人の輸出業者達に糾弾され大ごとになってしまった<sup>66)</sup>」と、高遠個人に過失のあつた結び方を記している。とくに、山口の論調では、仏教美術担当者、フェノロサ学会副会長の立場として、日本の陶磁器・工芸品を不正に海外流出させたとされる高遠への批評が全般的に厳しい。

これに対して、自殺の真相を別の角度から振り返る論考もある。『専修大学百年史』は、「さきに米國百年間博覧会へ贈つた、大量の物資の処分について、本省ないし上司と江木の意見がわかれ、その間、あたかも江木が、これによって私服を肥やそうとしたかの風聞を流され、これに死をもって抗議した<sup>67)</sup>」という高遠への同情的な見解を述べている。もともと専修大学側は、その設立過程のうえで、「江木高遠こそ相馬の盟友として、専修学校の設立者に名をつらねるべき人であつた<sup>68)</sup>」と好意的な見方をしているので、高遠への評価は若干甘いのかもしれない。しかし、百年史の作成にあたっては、相馬永胤の日記を参考に記述されているので、相馬の叙述が高遠の叙情を炙り出している可能性は高い。

他方、明治前期の外務一等書記官といえ、公使の数が少なく、公使に次ぐの官といへば高い官で、誠に頓々拍子の立身とし、賞めるもあり、羨むもあり、嫉むもあつた<sup>69)</sup>という意見もあることから、高遠の人事に対する私的な感情がさまざま渦巻いていたとみて間違いなからう。とくに、元老院という組織について、従来の研究は、「元老院議員には創設時から民権派に近い人物が多く、元老院を民権

62) 講談会社3月20日開催分の講談者が、フルベッキ、中村正直、小幡篤次郎、相馬永胤、菊池大麓となつたのは、その象徴といえる。しかし、講談会社の講談会としては当月が最後となり、4月以降は「本社都合有之当分之内講談之儀中止候間此段衆社員に報道す」と、中止された。『郵便報知新聞』、1880年3月19日、4頁、同年4月16日、4頁。

63) 専修大学編 [1981]、99、115-117頁。

64) 三宅 [1950]、155頁。

65) 山口 [1982]、13頁。

66) 松崎 [1998]、548頁。

67) 専修大学編 [1981]、102頁。

68) 専修大学編 [1981]、101頁。

69) 宮武編 [1926]、39頁。

派のガス抜き機関」と位置づけてきたが、近年の久保田哲の研究によると、「明治十年代前半の元老院議員が必ずしも民権派に近い思想を有していたわけではなく、「当該期の元老院の活動は自由民権運動とは一線を画していた」という主張がなされている<sup>70)</sup>。そうであるならば、沼間守一の如く、政府が79年に官吏に職務外の政談演説を禁じたことに抗議して元老院を退官した急進的な民権派人物に比べると、同年以降も講談会社を指揮して当代の洋学者や啓蒙思想家を結びつけ、民権派の支持を集めていく高遠は、嫉妬を買いやすい存在だったかもしれない。いずれにせよ、真相を極めるためには、相馬日記の一層の分析が必要とされる。

その相馬が高遠の訃報に接したのは、自死2日後の6月8日だった。さらに7月9日、相馬が高遠からの遺書を受け取ると、早速母と夫人に自殺の原因を伝えた<sup>71)</sup>。鰐水は71歳で健在だったが、年老いて精神が朦朧としていたため、高遠の死去を人から知らされなかったという<sup>72)</sup>。

新聞各社は高遠の訃報を自死1週間後の6月15日に報じたが、その内容は各社で分かれた。『読売新聞』は、「江木高遠君ハ何か仔細が有ッて此ほど任所にて自殺されたと其筋へ電報が有りました<sup>73)</sup>」と報じたが、『朝日新聞』は、「江木高遠君ハ任所にて病氣のよしに聞きしが何か事変のありしとか云う電報が去る五日に其筋へ達したりと但し其事の信否ハしらず<sup>74)</sup>」と、病死の可能性を含めて伝えている。対照的に、『東京日日新聞』は、「愚兄高遠儀本月七日米国ニ於テ死去致候趣申来候ニ付兼テ御懇意被成下候諸君へ御報知申上度存候處御宿所相分り兼候ニ付乍失礼新聞紙ヲ以テ此段御報知仕候 高遠実弟 江木松四郎<sup>75)</sup>」と、鰐水六男の松四郎名義で死亡広告を掲載した。

翌81年10月8日、鰐水も東京で死去した。翌日の死亡広告には、「父江木繁太郎儀長病の處養生不相叶<sup>76)</sup>」と、長年の病で養生が叶わなかったと記載されていた。遺族代表の氏名は、五男・保男だった。高遠の人生は異国の地で突然終止符を打たれたが、高遠が築いた江木家と福沢・小幡との関係は後年、五男・保男に引き継がれていく(図3)。



図3 江木鰐水(左)・江木高遠(右)墓碑

出典：谷中霊園(乙7号10側)にて、2021年9月12日著者撮影。

70) 久保田 [2014]、112頁。同書の第4章「明治十年代前半の元老院」も参照。

71) 専修大学編 [1981]、102頁。

72) 三宅 [1950]、155頁。

73) 『読売新聞』、1880年6月15日、1頁。

74) 『朝日新聞』、1880年6月15日、大阪版、1頁。

75) 『東京日日新聞』、1880年6月15日、4頁。

76) 『読売新聞』、1881年11月9日、4頁。



### 3. 江木保男の前半生：「洋行博士」

#### (1) レオン・デュリーとの出会いとフランス語習得

保男は1854（安政元）年5月、鰐水の五男として福山で生まれた（図4）。高遠から見れば、5歳下の弟である。当初は馬屋原<sup>まやはら</sup>宏の養子となっていたが、のちに江木姓に復した。1870（明治3）年7月、福山藩の貢進生として、同年1月に設置された大坂兵学寮（のちの士官学校への系譜）に入り、兵学を学んだ<sup>77)</sup>。72年には肺患に罹って退寮するが、快復後、「再び西京の中学校に入り仏学を修め後東京に至り仏学塾に入りしも学資給せざるを以て明治八年司法省に出仕し訳官とな<sup>78)</sup>」った。

この「西京の中学校」とは、1870年12月に開校した「日本最古の中学校」の京都府中学校を指す。明治維新を迎えて、東京では旧幕府から引き継いだ高等教育機関が再編された<sup>79)</sup>。京都でも大学校を創設して、西洋學術の撰取の要請に応えようとしたが、同年11月、その計画は中止されてしまった<sup>80)</sup>。京都大学校は京都府に引き継がれ、翌月、その経費は新政府から出される形で、中学として開校した<sup>81)</sup>。京都府中学校は、国学・漢学合併の中等教育機関のほか、欧学舎という洋学機関が設けられ、独逸学校、英学校、仏学校が中学の一分科として導入され、多くの西洋人を雇い入れた<sup>82)</sup>。

保男は、京都府中学校の欧学舎に通っていたと見られる。そして、この仏学校で、レオン・デュリー（ジュリー、シュリーとも表記）というフランス人教師からフランス語を勉強していた。後年にはなるが、93年11月の『読売新聞』に「仏人シュリー氏同窓会」という記事が掲載されている。それによると、「曾て京都に於て仏人シュリー氏の門に在りて目下在京中の人々ハー昨十三日新橋花月楼に於て同窓会を催せり」とある。そして、その「来会者ハ富井政章・高木豊三・榊原忠誠・原田輝太郎・小林樟雄・江木保男・市来政方氏等三十余名にして頗る盛会<sup>83)</sup>」だった。のちに、富井は法学者、高木は弁護士、小林は自由民権運動家と、多様な人生を歩むが、保男



図4 江木保男肖像

出典：江木五十嵐写真店百年の歩み  
刊行委員会編 [1985]、3頁。

77) 東京大学史料編纂所編 [1956b]、41頁。

78) 瀬川 [1893]、41頁。

79) 1868年、昌平坂学問所は昌平学校、洋学の人材育成を行ってきた開成所は開成学校、旧医学所は医学所（のち医学校）として、新政府に移った。69年6月、昌平学校は大学校に、さらに12月、大学校、開成学校、医学所は、大学、大学南校、大学東校と改称された。東京大学百年史編集委員会編 [1984]、86、92-93、99-101、127、198、209-210頁。

80) 京都の教育界では皇学派と漢学派が主導権を争ったので、68年9月に皇学所と漢学所を置いた。両学校は公家神官の師弟に国学・漢学を授けたが、反目を続けたため、両学校を廃止して京都に大学校を創設する計画を立てていた。安岡 [2012]、43頁。

81) 1870年2月には、洋学系統の学校制度案として、大学規則、中小学規則が定められ、中央に大学1校、各府藩県に中学・小学が置かれるようになった。安岡 [2012]、43頁。

82) 京都府教育会編 [1940]、331、337頁。

83) 『読売新聞』、1893年11月15日、1頁。



は、こうした同窓生とともにデュリーの授業を学んだ。

デュリーは1822年南仏に生まれ、マルセイユで医学を修めた<sup>84)</sup>。内科・外科に精通し、54年フランスにコレラ病が流行した際には、治療に努めて名声を博した。同年にクリミア戦争が勃発し、フランスが参戦すると、デュリーは軍医として出征した経験を持つ。他方、開国後の日本では、徳川幕府が函館に病院を建設し、この病院にフランス人医師を招聘しようと試みた。そのためにデュリーは1862（文久2）年に来日したが、幕府の計画が中止になってしまったので、翌年長崎に設置されたフランス領事館に副領事として勤務することになった。このとき、長崎奉行の求めに応じて、済美館<sup>85)</sup>でフランス語を教えたのが、デュリーによる日本人教育の発端となっている。1867（慶応3）年には、徳川昭武一行によるパリ万国博覧会への派遣にもデュリーは随行し、翌68年の再来日後も長崎のフランス領事館へ帰任した。しかし、70年の普仏戦争の頃に、その閉鎖が決定されると、フランス政府はデュリーに他国への転任を命じたが、彼は領事を辞め、同年10月に正式なフランス語教師として広運館<sup>86)</sup>に雇用された。広運館の教え子には、井上毅や西園寺公望、そして前出の原田輝太郎がいた。しかし71年、広運館の経費削減のため、デュリーは京都に転じ、同年10月に設立された欧学舎の仏学校で勤務することになった<sup>87)</sup>。

このころ、保男は大坂兵学寮に入寮し、72年病気で退寮したので、早くとも京都の仏学校へ入学するのは、同年以降だったと思われる。また、遅くとも翌73年8月までには、仏学校でデュリーの教育を受けていた。鰐水の日記には、保男の養父・馬屋原宏が鰐水の許を訪れて、保男に関する新聞記事を見せている。そこには、保男が仏国教師に学び、「勉学冠生徒、最長于暗誦」、「勉学不休、以其長記誦稱ヲレシタール（Orateur カ）<sup>88)</sup>」と、一日中勉強しながら、長文の暗誦・記誦に努めてフランス語を話している様子が描かれている。実際、デュリーは、仏学校唯一のフランス人教師として全ての教務に携わったが、とくに詩を好んで暗誦させていた。こうしたフランス詩歌の教育は広運館時代から培われ、それを暗誦させることで人生哲学を説いたと伝えられる。

しかし、72年の学制発布により、欧学舎の運営経費が中央から認められなくなったため、仏学校も廃止されることとなった。この影響で、デュリーは東京へ移住し、75年4月から2か年の契約で東京開成学校に転任し、フランス文学、歴史などを講じた。しかし、就任直後に所属していた仏語諸芸学科が廃止されたため、翌76年9月からは東京外国語学校へ移動し、東京開成学校にも兼任して出講した<sup>89)</sup>。デュリーが東京開成学校に赴任する際には、何人かの生徒と一緒に京都から東京へ同伴した。前述の富井・高木・小林は、デュリーに随行し、東京外国語学校に入学している<sup>90)</sup>。

保男の場合は、前述のとおり、「東京に至り仏学塾に入りしも学資給せざるを以て明治八年司法省に

84) 以下、デュリーの略歴は、高梨編 [1938]、112-124頁；京都府教育会編 [1940]、356-360頁；京都府編 [1974]、352-354頁；飯田 [1998]、116-118頁を参考とした。

85) 済美館の前身は、1858（安政5）年に設立された英語研究所である。その後、英語所、洋学所、仮語学所、済美館と名称が変更された。高梨編 [1938]、114-115頁。

86) 済美館は1868（明治元）年3月に広運館と改称された。高梨編 [1938]、115頁。

87) 原田もデュリーに同伴し、仏学校の助教として通訳を務めた。高梨編 [1938]、122頁。

88) 東京大学史料編纂所編 [1956b]、189頁。Orateur は、フランス語で話し手の意味。

89) 東京外国語大学史編纂委員会編 [1999]、561-562頁。

出仕し訳官となる」と書かれているだけなので、上京後の進路ははっきりわからないが、東京開成学校に入学したものの、仏語諸芸学科が廃止になった時点でフランス語の修得を辞めて、司法省へ出仕して訳官になったというのが、ひとつの解釈である。75年だと、デュリーがまだ東京外国語学校へ転任する以前である。『京都府教育史』には、「京都府も仏学校生徒中の優等生を彼（デュリー：引用者註）につけ、開成学校に入学せしめたが、暫くすると此の学生達に対する官費の支給が停止せられたので、彼は右の生徒を自己の官舎に引き取り、政府雇入れの私人や外国商人に周旋して職を見付けてやつた<sup>91)</sup>」とある。いまひとつの解釈は、渋川忠二郎とともに中江兆民の番町仏学塾へ通い、一緒に司法省の訳官になった可能性である（注94参照）。

## (2) 司法省訳官からパリ万国博派遣団員・郵便報知新聞通信員へ

司法省在勤中は、「大坂府に上等裁判所の設置に際し仏国法律博士某司法省顧問に聘せられたるを以て君其訳官として大坂在勤を命せられたり<sup>92)</sup>」とある。大阪上等裁判所の開庁は75年7月2日なので<sup>93)</sup>、保男の司法省出仕がこれに合わせたものだったに相違ない。某は、ロベール・リップマンと思われる。渋川忠二郎の伝記を参照すると、大阪上等裁判所設置の際、司法省はリップマンを法律顧問および司法事務指導として採用している<sup>94)</sup>。しかし、保男は通訳で飽き足らぬ人間だったようである。「顧問某君に勤めて曰く官吏生活の目的を断念して商人たるへしと君其忠告の深味あるに要し明治十年に至り決然冠<sup>か</sup>を掛けて志を傾け<sup>95)</sup>」とあるように、保男は2年間で司法省を辞し、商業に関心を移した。

おりしも77年2月には、その翌年に開催されるパリ万国博覧会への参加を決定した明治政府が、大久保利通を総裁、松方正義を副総裁とする臨時博覧会事務局を設置し、フランス留学中の前田正名を事務官に任命して、その参加準備を一任した<sup>96)</sup>。保男としては、そのタイミングを逃したくなかったはずである。そのために、保男は、東京の漆器蒔絵家具商で、パリ万国博へ出品予定のあった新井半兵衛の雇人という肩書きを付け、民間派遣団員の一人として出品業務に携わるために、翌年渡仏した<sup>97)</sup>。また77年は、デュリーが任期満了でフランスへ帰国した年でもある。その際、デュリーは、京都府に進言して、染色・陶器・製糸など技術修得のために、優秀な生徒8人をフランスへ同行・留学させて

90) その後、高木は司法省法学校でフランス法を学んで、84年に判事となり、司法官や弁護士を歴任した。小林は、上京後もデュリーと同居し、フランス法を学んで自由民権思想に共鳴するが、85年の大阪事件で捕らえられる運命を背負う。名古屋大学大学院法学研究科「日本研究のための歴史情報」サイト、『人事興信録』データベース (<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/>)、第4版：高木豊三、牧野 [1890]、2頁。東京外国語大学史編集委員会編 [1999]、562頁。

91) 京都府教育会編 [1940]、358-359頁。

92) 瀬川 [1893]、41頁。

93) 「公文録」司法省之部、明治8年6月（国立公文書館蔵、請求番号：公01627100）。

94) リップマンは、78年11月フランスへ帰国した。『公文録』司法省之部、明治10年11月（国立公文書館蔵、請求番号：公02125100-013）。なお、渋川も京都の仏学校におけるレオン・デュリーの門下生だった。デュリーに随行して上京後、中江兆民の番町仏学塾に学び、司法省翻訳局に出仕し、大阪上等裁判所設置に合わせて来阪した。その後、代言人として大阪事件の公判に弁論し、82年に大阪法学会を創立、関西法律学校（現・関西大学）創立の有力な母胎を築いた。大久保 [1890]、712-713頁；越山 [1900]、334-335頁；関西大学創立七十年史編集委員会編 [1956]、6-10頁。

95) 瀬川 [1893]、41-42頁。

96) 三井文庫編 [1980]、287頁。フランスは、普仏戦争で凋落した国威回復のため、76年にパリ万国博開催（78年5月20日～11月10日）を企画した。祖田 [1987]、53頁。

97) 瀬川 [1893]、40-42頁。木山 [2009]、90-91頁。

いる。その1人に、近代染色技術に貢献する稲畑勝太郎がいた<sup>98)</sup>。また、先述の富井も、この年に東京外国語学校を退学して、渡仏した<sup>99)</sup>。もしかすると、そのような恩師や門下生の渡仏を耳にした保男は、彼らに触発されて自らも海外渡航の機会を探し出したのかもしれない。

他方で、保男はフランス滞在中、『郵便報知新聞』の通信員という顔も併せ持っていた。そして、パリまでの道中やフランスの景況、パリ万国博覧会の様子や各国の出品状況、日本からの出品の売れ行き、賞牌を受領した人名の一覧などを認めて、定期的に日本へ送信していた。その記事は、78年3月5日から翌年2月3日までの11か月、「仏国博覧会通信」というタイトルで、72回にわたって記名で掲載された<sup>100)</sup>。たとえば、パリに到着するまでは、保男の往路の紀行が紹介されている。それによると、保男は78年2月12日に横浜を出港し、3月29日にパリ（リヨン）駅に到着し、前田正名事務官の迎えを受けて馬車で旅舎兼事務局へ向かった<sup>101)</sup>。1回の記事の分量は紙面1段分で、数日間掲載されては、次号の連載まで10日～2週間程度の間隔が開いた。おそらく、保男は1か月に2～3回、数日分の原稿を、パリから東京の報知社へ国際郵便で投函していたのだろう。そして、原稿が配達され次第、主幹の藤田茂吉が、それを当日の紙面のスペースに合う長さに区切って、連載したと思われる。

『郵便報知新聞』には、早くからパリ万博日本側事務局の録事を掲載していた。ここには、殖産興業政策を進行して外貨獲得を図りたい大隈重信の意向が働いている。たとえば、「仏国博覧会へ渡航人名」として、「新井半兵衛代理 福島與助（外一名）」と書かれているが、この「外一名」こそ保男である<sup>102)</sup>。その保男と『郵便報知新聞』との縁を取り持ったのは、おそらく兄の高遠である。パリ万博が開催されていた78年は、「江木学校講談会」の開始時期でもあった。たとえば、同年11月の『郵便報知新聞』は、3頁に保男が「仏国博覧会場略報」（9月6日記）で鉄道器具・電信機・建築用材・船舶機械などの陳列される様子を伝え、4頁で高遠が「江木学校講談会」で海陸軍論を演説することを告知している<sup>103)</sup>。新聞の購読者がこの2人を実の兄弟だと認識していたかはわからないが、主幹の藤田や印刷長の栗本が知らないはずはなかろう。従来の研究では、高遠と保男の分析が別々に行われていたため、なぜ保男に『郵便報知新聞』通信員の職務が回ってきたか、気づきにくかったが、2人を同時代史的に追跡することで、その関係性が浮上してくるものである。

### (3) 「洋行博士」としての貿易活動

さて、渡仏後の保男は三井物産会社に移籍したことが、木山実によって近年明らかにされている。博覧会に参加するためには、出品物の輸送をはじめ、さまざまな事務処理を要する。そこで、松方や

98) 高梨編 [1938]、123頁。

99) 富井は、渡仏後、「仏国リヨン府東洋博物館雇となり勤務の余暇を以て」リヨン法科大学に入り、法学博士の学位を取得、帰国して司法省へ就職した。のちに帝国大学法科大学学長、立命館大学長、和仏法律学校（現・法政大学）長などを歴任した。花房・山本編 [1892]、63頁。『人事興信録』データベース、第4版：富井政章。

100) タイトルは、「仏国博覧会紀行」、「仏国博覧会景況報告」、「仏国近況」、「仏国博覧会場略報」など、変更された。また、江木の名前も、78年5月1日号までは「保雄」と表記されたが、同年6月15日号以降は「保男」と書き改められた。

101) 『郵便報知新聞』、1878年3月5日、3頁、同年5月23日、3-4頁、1879年2月3日、4頁。

102) 『郵便報知新聞』、1878年1月31日、1頁；木山 [2009]、91頁、表3-8。

103) 『郵便報知新聞』、1878年11月8日、3-4頁。

前田は、三井物産に対してパリ万博出品物の調達やその輸送の取扱いを命じ、あわせて開催地パリへの出店を勧誘していた。こうした経緯によって、まず三井物産パリ支店が78年1月に開店した<sup>104)</sup>。この間、保男はパリ支店にいたようである。さらに万博閉会後の80年、上州の島村勸業会社が蚕種紙の売込みを三井物産に委託したことを契機として、ミラノ出張店が設置された。ミラノでの蚕種紙売却は同年1月に始まり、2月から保男がパリ支店から出張し、ミラノ出張店の支配人に就任した<sup>105)</sup>。

木山は、その理由を、「渡仏後、現地でその希有な語学力が買われて<sup>106)</sup>」スカウトされたと推測するが、保男の語学力は、これまで見てきたとおり、渡仏前に修得していた。デュリーの門下生という学歴は、当時、「海外店舗に充当すべき要因の不足に苦慮した物産<sup>107)</sup>」にとって、貴重で勧誘すべき人材だったに相違ない。ただし、ミラノ出張店は、蚕種紙売却の季節にのみ開設されていたため、パリ支店の活動の延長上に設けられた季節的・暫定的なものにすぎなかったようである。そのせいか、支配人就任期における保男の月給（7円）は、他の支店支配人のそれ（20～70円）に比べると、極端に低かった<sup>108)</sup>。

保男は、蚕種の販売状況を上州島村の田島武平に報告している。それによると、保男自身が田舎のほうまで買い手を探してみたが、相場の下がることを期待している百姓しかいない。そのため、当年の蚕種が無駄になっても、来年のために定価を保持したほうが良いと忠告している。実際、蚕種の売れ行きは非常に厳しく、総枚数55,660枚のうち、売上枚数はその24%の13,303枚に過ぎなかった<sup>109)</sup>。翌年1月、やはり蚕種紙を売り込むためにミラノへやって来た伏島近蔵は、宿泊先のホテルで保男と食事を共にし、ヨーロッパの景況を聞いている<sup>110)</sup>。このように、保男は遅くとも81年2月まで支配人としてミラノにいたが、ミラノ出張所は同年中に閉鎖された<sup>111)</sup>。保男が、フランスから日本へいつ戻ったかは、明らかではないが、既述のとおり、父・鰐水が同年10月に日本で死去し、保男が死亡広告を新聞に掲載した事実を踏まえると、この頃までに帰国したのではないかとみられる。

しかし、保男は再渡欧する。83年開催のアムステルダム植民地・産業国際博覧会<sup>112)</sup>にあたって、日本政府の出品やその他の委託品を携えてオランダへ出張した。そして現地において万国審査官を命じられ、その審査会議においては専ら日本品の説明をした結果、多くの出品物が第1等の賞を獲得することができ、閉会后、オランダ政府から審査の功労を讃える賞状や賞牌を授与されたという<sup>113)</sup>。たしかに、『稲畑勝太郎伝』を見ると、「和蘭万国博覧会本邦出品人代表」として、稲畑と並ぶ保男の姿が映し出されている（図5）。

104) 三井文庫編 [1980]、287、290頁。

105) 丑木 [1999]、70頁；木山 [2009]、78頁。

106) 木山 [2009]、92頁。

107) 木山 [2009]、98頁。

108) 木山 [2009]、78、96頁。

109) 丑木 [1999]、102-104頁。

110) 群馬県史編さん委員会編 [1985]、70、89-90頁。

111) 木山 [2009]、102頁。

112) 1880年代に欧米列強の帝国主義化が始まると、国際博覧会でも、植民地の製品や市場をアピールし、新しい交易ルートが開発が目指された。平野 [1999]、34-35頁。

113) 瀬川 [1893]、42頁。



以後も、保男は積極的な海外渡航を重ねていった。85年には政府の内命を受けてシベリア内地へ出張し、ロシア政府に日本茶を売り込み、小麦粉をはじめとする日本産食料品を輸入するよう、約束を締結してきたという<sup>114)</sup>。翌86年、もう一度ヨーロッパへ渡って、日本の醤油輸出を試みるために、その実情と日本醤油の販路を取り調べた。当時のヨーロッパでは醤油が「ジャパニーズ・ソース」ともはやされて評判を得ていたが、日本からの輸出は停滞していた。保男からの報告によると、オランダでは、蘭印ジャワ島産の醤油が「ジャパニーズ・ソース」と称して、ほぼ日本醤油と同じ製法・荷造方法でヨーロッパへ輸出されていたことが明らかにされている<sup>115)</sup>。

おりしも1880年代前半期は、松方デフレ下にあり、輸入も停滞したが、輸出も伸び悩んでいたため、生糸以外の日本製品が海外市場での需要に応答し、その販路を開拓することが、国益としても求められていた。保男の行動は、パリ万博のための初渡仏以来、そうした日本製品全般のセールス（外交勧誘・販売）活動と製品個々のマーケティング（市場分析やターゲティング）を行う最前線に立つ役割を、海外、とりわけヨーロッパで演じていた。保男の生涯海外渡航回数は、ヨーロッパへ13回、アメリカ合衆国へ3回、中国・朝鮮へ各2回<sup>116)</sup>、シベリア内地へ1回、エジプトへ1回に及んだ。おかげで、保男は外国語を相当得意とし、フランス語はもちろん、ドイツ語、イタリア語、英語に精通し、海外諸国の事情に詳しくなっていた。保男がこうした経歴を持っていたことで、パリやロンドンの日本人商人は、保男を「洋行博士」として代名詞を用いて接したという<sup>117)</sup>。

#### (4) 企業勃興期と会社設立

保男は1888（明治21）年に日本へ帰国した。80年代後半期の日本経済は、松方デフレを収束させてからの企業勃興期に突入して好景気に湧き、会社の設立ブームが到来していた。保男も、ご多分に洩れず、2社の設立に対して出資を行っている。

1つは、88年5月に創立した東京乗合馬車会社である。日本人による東京・横浜間の乗合馬車営業が、69年に初めて認可されて以来、東京府内の乗用馬車台数は、76年から90年に249台から693台へと、



図5 アムステルダムでの江木保男（前列左）と稲畑勝太郎（前列右）：1883（明治16）年

出典：高梨編 [1938]、175頁。

注：出典によると、後列の人物は、右から高木喜一・高木齋造とある。

114) 瀬川 [1893]、42頁：『実業之日本』第7巻第19号（1904年9月）、48頁。

115) 『朝日新聞』、1887年4月24日、大阪版、4頁。

116) 「江木保男氏ハ曾て清国に遊歴せし時李鴻章に面せし」機会があった。その縁で、日清戦争関係の写真帖を進物として贈っている。『読売新聞』、1894年12月26日、5頁。

117) 『実業之日本』第7巻第19号（1904年9月）、48頁。

118) 山本編 [1986]、32頁。



2.7倍に増加していた<sup>118)</sup>。ゆえに、乗合馬車会社の設立は、企業勃興期にピークを迎えていた。同社の資本金は20万円で、発起人には、総代の保男を筆頭に、6人が名を連ねていた<sup>119)</sup>。他の5人は、内国通運会社頭取の佐々木莊助、同社元頭取で、徳川時代に飛脚問屋を営んでいた和泉屋の吉村甚兵衛<sup>120)</sup>、野田醤油の茂木佐平治家7代亀雄<sup>121)</sup>、総州成田生まれで日本橋区蛸殻町在住の西村甚右衛門、総州武射郡出身の池田栄亮、茨城県土浦町の醤油醸造業者・色川三郎兵衛であった。茂木と西村は醤油の海外輸出を図るため、81年蛸殻町に東京醤油会社を設立し、色川とともにアムステルダム植民地・産業国際博覧会に醤油を出品し、金牌を受賞している<sup>122)</sup>。その点では、保男の海外活動に近い人物だといえる。池田は、総武鉄道の創立に尽力した千葉県の名望家であった<sup>123)</sup>。

社長の保男は馬車数十輛を買い入れるために渡欧し、翌89年3月に帰国した<sup>124)</sup>。輸入された乗合馬車は12人乗りのオムニバスと呼ばれ、並の乗合馬車よりは大きい、鉄道馬車よりは小さく、朱色で「なかなか立派<sup>125)</sup>」だったようである。5月11日には、開業式が本所菊川町の本社で行われ、陸海軍将校、警視監、各警察署長、東京府会議員などを招待し、保男が祝詞を朗読した。式の終了後は、来賓一同を新調の乗合馬車20余輛に乗せて両国橋まで運び、かつて高遠の講談会場でもあった井生村楼ほか2か所で祝宴を開いた<sup>126)</sup>。

乗合馬車は、本社のある本所菊川町を起点に、二の橋－両国－美倉橋－万世橋－小川町を經由して、九段坂下に至る。それぞれの停車場間が1区間となり、1区1人1銭で乗車できた<sup>127)</sup>。本所を起点とし、両国を經由したのは、総武鉄道との接続のためだと思われる。「1890（明治23）年恐慌」の影響で着工が遅れたため、総武鉄道の本所（現・錦糸町）－佐倉間開業は94年に延びたが<sup>128)</sup>、武総間の旅客輸送を乗合馬車と鉄道で結びつけたかった意図は、以上の情報から判断できる。

8月28日には定式総会が開かれ、開業以来3か月の収支決算が報告された。それによると、収入は4,540円、支出は2,400円、差引の利益は2,140円で、株主へ1割5分の配当を充て、残り3分ほどを積立金に回すことが決定された。ただし、馬車自体は今後、輸入品から国産品へ切り替える方針となった。翌90年4月には乗車賃を値下げし、従来の2区分を新たな1区として1銭5厘で乗車できるようにした。この間、同社は新たに、雷門－厩橋－浅草橋－通旅籠町－日本橋－京橋－新橋という路線を

119) 東京都編 [1983]、53-57頁。

120) 『人事興信録』データベース：第4版：吉村甚兵衛。

121) 茂木佐平治家は1782（天明2）年、3代主の時に醤油醸造業を開始した。7代佐平治は、商機を捉えることに敏感で、明治初年に内国通運会社の発起に参与して、江戸川に通運丸の運行を開始させたり、諸種の広告手段を巧みに出したりして、亀甲萬の名を全国に知らしめた。野田醤油株式会社社史編纂室 [1955]、107-108頁。また、吉村甚兵衛の二男・佐平は、亀雄の三女を妻とした。『人事興信録』データベース、初版：吉村佐平。

122) 中村 [1889]、32頁；野田醤油株式会社社史編纂室 [1955]、108頁；土浦市史編さん委員会編 [1975]、505、731頁。

123) 中村 [1889]、42頁。

124) 『読売新聞』、1889年3月28日、3頁。

125) 『読売新聞』、1889年5月7日、3頁。

126) 『読売新聞』、1889年5月14日、3頁。

127) 『朝日新聞』、1889年5月5日、東京版、3頁。

128) 87年設立の利根運河会社が、東京－銚子間の貨物輸送に多大な貢献をなすと、期待された。その競争を避けるため、武総間の鉄道は89年に免許を交付、設立された。老川 [1980]、86-87、95頁。

129) 『読売新聞』、1890年4月2日、4頁。

開業させた<sup>129)</sup>。このルートは、日光街道と東海道を往復するもので、官設鉄道の新橋停車場で乗降する客を乗合馬車に誘導したと想像される。

しかし、乗合馬車は安全面に欠け、多くの交通死傷事故を起こした。開業して1年以内にも、60歳の女性が東京乗合馬車会社の馬車に曳き倒されて、翌朝に死亡した<sup>130)</sup>。また別の日、男児が同社馬車の車輪に触れて倒され、頭部左の耳脇へ重傷を負い、翌朝に死亡している。この馬車を運転していた馭者は、罰金40円に処せられた<sup>131)</sup>。馭者には退役軍人が採用され<sup>132)</sup>、開業当初には定額の月給が支払われていたが、開業3か月後には乗客賃金の収入に応じた歩割金の給与に改められている<sup>133)</sup>。馬車の危険防止と安全運転を目的とする取締規則は、1870年代初頭に、馬車取締規則、馬車運行規則書、馬車規則など制定されたが<sup>134)</sup>、馭者の気質や歩合制賃金によって、必ずしも遵守できたとはいえなかった。

したがって、保男社長を中心とする積極的な経営方針に対しては、恐慌も重なって、異を唱える者が少なくなかったようである。開業翌年の90年5月に株主の公選で茂木亀雄が社長に就任すると<sup>135)</sup>、保男は乗合馬車会社の経営から手を引いたと思われる<sup>136)</sup>。

2社目は東京製革会社という牛皮の国産製造と販売を目的とする会社だが、同社の情報はあまり存在していない。管見の限りでは、89年10月の『官報』に同社の設立願があり、資本金は10万円、発起人は荒賀直哉ほか8人だったことを伝えている<sup>137)</sup>。また、翌月の『朝日新聞』には荒賀をはじめ5人の発起人が書かれている<sup>138)</sup>。この中に保男が入っていたかはわからないが、翌年1月の『朝日新聞』には、「東京製革会社は荒賀直哉江木保男木村莊平諸氏の発起に係り（中略）目下株式の募集に着手せし由<sup>139)</sup>」とあるので、保男が設立時から発起人だったことは間違いなかろう。その続きに、「資本金十万円の中当分六万円を募集して営業を始め愈々利益を得るに至るまで八万事實質素を主とする由なり」とあるが、はたしてこの会社が翌年の恐慌を乗り切れたのか不明である。

保男は、各社会経済団体にも幅広く顔を出していた。93年2月に発足した日本貿易協会は、前田正名が粗製濫造防止策や直輸出振興策などを掲げてきた産業組織化運動に合流した一団体だったが<sup>140)</sup>、保男はその会員にもなっていた<sup>141)</sup>。さらに、翌年8月には、保男が日露実業協会の臨時総会に出席し、

130) 『読売新聞』、1890年7月18日、3頁。

131) 『読売新聞』1890年9月19日、2頁。

132) 瀬川 [1893]、43頁。

133) 『読売新聞』、1889年8月17日、2頁。

134) 山本編 [1986]、33頁。

135) 『読売新聞』、1890年5月16日、別冊、1頁。なお、野田醤油株式会社社史編纂室 [1955]、108頁は、「東京市中には赤馬車を創始して新時代の交通機関に船便をつけるなど鬼才を発揮して世人を驚倒させた」と語るが、赤馬車の輸入は保男の業績である。

136) その後、東京乗合馬車会社の報道は、『読売新聞』、『朝日新聞』とも1903年を以て終わる。同年には東京電車鉄道が、東京市内で初めて路面電車の営業を開始し、翌年までに東京市街鉄道と東京電気鉄道を合わせた3社が路線網を拡張させ、鉄道馬車に代替した。東京都交通局 [2012]、49頁。よって、東京乗合馬車会社もこの頃消滅したと推察される。

137) 『官報』第1891号、1889年10月16日、172頁。

138) 『朝日新聞』、1889年11月16日、東京版、2頁。

139) 『朝日新聞』、1890年1月25日、東京版、4頁。

140) 祖田 [1987]、170-171頁。

141) 『朝日新聞』、1893年7月11日、東京版、1頁。

役員の新改選の結果、前田正名が会長に、保男が幹事に当選した<sup>142)</sup>。パリ万博以来となる前田と保男との輸出振興のための親交は、15年経っても継続していた。

#### 4. 江木保男の後半生：江木写真店の業祖

##### (1) 弟・松四郎の米国留学と神田江木商店の開業

当時としては希有な海外渡航歴を持つ保男が、どういう経緯から写真店の経営者になったのか。そのために、保男の弟・松四郎（鰐水六男）の足跡を追うことにしてみよう。

「洋行博士」だった保男は、欧米アジアの各地で、写真を撮影する現場に遭遇したに相違ない。保男は、初渡仏から帰国後の1880（明治13）年——この年は高遠が自殺した年でもある——8月に、米国からソーラーカメラ（写真引伸器械）を輸入し、江木家が居住していた京橋区山城町（現・中央区銀座6～7丁目2番の外堀寄り）で写真業の経営を始めた<sup>143)</sup>。国産品を輸出して外貨を稼ぎ、舶来品を輸入して明治日本の日常生活を一変させたいという保男のスタンスは、写真技術や写真産業にも向けられ始めていた。84年に、保男と松四郎は神田区神田淡路町2丁目4番地（現・千代田区神田淡路町2丁目のワテラスアネックス付近）に写真店を開業した。保男にとって同年は、アムステルダム植民地・産業国際博覧会から帰国し、シベリア出張の前年にあたる。

他方で、1856（安政3）年11月に生まれの松四郎は、この年24歳になっていた<sup>144)</sup>。谷中霊園にある松四郎の墓碑によると、「明治十年従先生来東京十七年遊米回桑港修写真術居五年術成而帰<sup>145)</sup>」と、嗣子の江木善一によって記されている（図6）。すなわち、77年に父・鰐水とともに福山から上京し、神田淡路町の写真店を開業させた84年に渡米し、サンフランシスコで写真術の勉強・研究に励み、89年に帰国したと推定される。『商海英傑伝』には、保男が「弟二人を米国に遣はして実業を学ばしめ」とあるので、末弟の新五郎（鰐水七男）も一緒に渡米したのだろう<sup>146)</sup>。

神田淡路町の写真店は通称「江木写真館」と言われるが、正式な店名は江木商店という。松四郎の長女・末子の回顧によると、神田



図6 江木松四郎墓碑

出典：谷中霊園（甲1号12側）にて、2021年9月12日著者撮影。

142) 『朝日新聞』、1894年8月28日、東京版、5頁。

143) 日本写真協会編 [1976]、94頁。

144) 松四郎と新五郎の略歴は、瀬川 [1893]、43頁；東京大学史料編纂所編 [1956b]、331頁；江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会編 [1985]、10頁に依拠する。

145) 江木松四郎墓碑、谷中霊園所在（甲1号12側）。

146) 1863（文久3）年12月に生まれた新五郎の情報は、ほとんど判明しない。松四郎と渡米後、「尚ほ布哇国に在りて商業に従事」（瀬川 [1893]、43頁）、「大正12年頃濠州シドニーに客死」（東京大学史料編纂所編 [1956b]、331頁）という記載のみである。

の江木商店は100坪余の土地に建設され、自宅ともアメリカ式建築で実にハイカラに設計され、既に水洗便所の設備もあった。当時の客層は、西園寺公望、華頂宮博経親王の兄にあたる小松宮彰仁親王、旧大垣藩主で伯爵の戸田氏共、旧岩国藩主で男爵の吉川経健といった華族や上流階級を主としていた<sup>147)</sup>。皇太子嘉仁（のちの大正天皇）も、92年7月、時に12歳だった学習院初等科在学中に、その門内で「其左右前後に校長及び内外各教員並に各級生徒等千餘名着席して撮影」しているが、この撮影を「神田淡路町2丁目4番地写真師江木本店」に命じていた<sup>148)</sup>。92年という時期からして、この写真師は松四郎だと考えられている。

夏目漱石が94年3月、和服・洋装2種の半身像を写したのも、神田の江木商店だった。そして翌年10月頃、そのうち洋服姿の分を見合い写真として、これから妻となる中根鏡子に送っている<sup>149)</sup>。95年開催の第4回内国勸業博覧会で、「小松宮」の写真プロマイド紙で焼いて出品した記録が残されている<sup>150)</sup>。ただし、末子によると、保男はあくまで江木写真店主で、これらの写真を撮影したのも弟の松四郎だったと推定されている<sup>151)</sup>。

## (2) 新橋江木支店の開業と慶応義塾

少し時間を遡らせるが、1891年4月3日、保男は神田淡路町の本店に続いて、銀座にも進出すべく、新橋に近い土橋角の京橋区丸屋町3番地（現・中央区銀座8丁目3番7号）の土地を譲り受け、そこに奇抜な6階建の塔を建てて、江木商店の新橋支店を開業した。同時に、神田淡路町の店舗を本店とした。この6階建ランドマークは、当時「江木塔」と呼ばれた（図7）<sup>152)</sup>。

江木支店開店のエピソードは、当時の新聞にも大々的に掲載された。『朝日新聞』は、「江木塔」に注目している<sup>153)</sup>。6層の高閣には「大人二銭小児一銭にて登覧せしむ」と、有料で登って展望できた。また明後日に迫った開店式当日には、「昼夜西洋音楽、道化芝居、美人手踊り、ベンガール採光色火、大型軽気球上げ、南京烟花等さまざまの催し」が予定されていた。その日に限っては、「六層楼も無料にて登らしむる」ことができた。『時事新報』の記者は、実際



図7：新橋江木支店と「江木塔」：1891（明治24）年  
出典：江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会編 [1985]、4頁。

147) 江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会編 [1985]、15-16頁。

148) 『読売新聞』、1892年7月22日、2面。

149) 松岡編 [1929]、写真31・32。

150) 日本写真協会編 [1976]、108頁。

151) 江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会編 [1985]、19-20頁。

152) 布川 [1966]、76頁。

153) 『朝日新聞』、1891年4月1日、東京版、3面。



に「江木塔」に登楼した。「規模固より小なれば上下道を二様に設けず、為めに螺旋階の窮窟を感」じているが、「塔上に昇れば芝離宮の森を越して海面を見渡し、南は高輪品川の洲先より房総の山を眺めば、東北は上野の森、浅草の高塔、本所、深川一面を見渡し、眺望頗る佳なり<sup>154)</sup>」と絶賛している。銀座の文明開化は、煉瓦街に代表されるように、路上から始まっていたが、ついに立体空間として享受されることになったわけである。

他方、『読売新聞』には、「写真、西洋雑貨、ゴム印判等を発売する神田淡路町なる江木商店の支店にして総体煉瓦造なるが其三階を運動場となし諸器械ハ勿論都て欧米の粹を蒐め来月三日該館主成田常吉氏の名弘を兼ねて開業する由<sup>155)</sup>」とある。成田常吉は、1863(文久3)年1月越前国南條郡竹生町に生まれ、函館でロシア人から写真を教わった横山松三郎の門を75年に叩いた<sup>156)</sup>。79年から84年まで、大蔵省印刷局写真科の技生として雇われたのち、横浜の写真店の助手として評価され、江木支店で開業から17年間勤務した<sup>157)</sup>。

福沢諭吉の一万円紙幣の基礎になった原写真の撮影者も、成田常吉である。一万円札の肖像の参考になった着物姿の写真は、開店まもない1891年頃に江木支店で撮影され、銅版画家のエドアルド・キヨッソーネによって、銅版肖像画に起こされたと言われている。写真台紙には、「福山館写真/成田常吉製/江木支店/東京新橋丸屋町三番地」と印字されており、裏面には、「福澤先生肖像其数甚尠からずと雖此写真は最もよく先生の風格を表現せるものにして筋肉の緊張實に眞に逼れり先生自らも生前最も此寫真を好まれし(後略)」という田中一貞による1917(大正6)年の墨書が残されている<sup>158)</sup>。福沢は、幕末・明治期としては珍しく青年期から老年期に至るまで写真の被写体になり続けた人物であるが、福沢は生前、「何かの際にはぜひこの写真を使うように」と指示していたほど、気に入っていたらしい<sup>159)</sup>。

江木商店が出版した『東京景色写真版』にも、この福沢の原写真が掲載されている。『東京景色写真版』は、江木商店で出版されたアルバムの合作のようなもので、その1つとして、『慶応義塾校舎一覽』というアルバムが所収されている。そこには、1890~97年には慶応義塾長に就任していた小幡篤次郎の肖像を筆頭に、慶応義塾表門、表門から芝公園や品川台場を臨む遠景、表門の前の三田大通り、本館と演説館、構内の教場や福沢家居宅、幼稚舎などの写真が載せられている。そして、それらの写真に続いて、91年12月現在の「慶応義塾規則」が大学部、普通部、幼稚舎、商業夜学校の順に記載されている。また、「福沢先生肖像」と「小幡先生肖像」の写真版は、ともに江木商店にて15銭で発売されていた<sup>160)</sup>。このように、江木兄弟-福沢諭吉・小幡兄弟との縁は、高遠-甚三郎がともに若くして

154) 東京都編 [1990]、519頁。

155) 『読売新聞』、1891年3月31日、3面。

156) 日本写真協会編 [1976]、87頁。

157) 遠山編 [1907]、365頁。

158) 慶応義塾大学アート・センターサイト、「成田常吉撮影、江木支店福山館製《福澤諭吉肖像》の修復」(<http://www.art-c.keio.ac.jp/research/collections-research/2017-records-1-1/2017-03-25-hukuzawa/>)。田中一貞は慶応義塾教授で、1905~21年に図書館主任、監督(館長)を務めた。墨書の「雖」は偏のみ。この写真は、長らく慶応義塾メディア・センターの所管下にありながら、その存在を知られることが希であった美術品の1つだった。2016年7月~17年3月に、慶応義塾大学アート・センター(KUAC)を通じて、専門家が修復保存処置を施している。

159) 「ステンドグラス 一万円札と福澤諭吉」、『塾』296号、2017年、16-17頁。



鬼籍に入って10年以上経っても、なお保持されていたのである。

### (3) デュリー記念碑建立と保男の死去

保男の恩師・デュリーは、1891年10月24日母国フランスのマルセイユにて、69歳の生涯を閉じた<sup>161)</sup>。その訃報は翌月2日の『読売新聞』死亡広告欄に掲載されたので<sup>162)</sup>、かつての門下生たちは、日本国内にいてもすぐ知ることとなったはずである。したがって、前述した93年11月開催の同窓会は、デュリーの訃報を受けた門下生たちが、故人となった恩師を偲ぶことを目的として、没後2周年を迎えて一堂に会したと思われる。

そして、おそらくこの同窓会で、デュリーの功績を讃える記念碑建立の計画が開始されたのだろう。『稲畑勝太郎君伝』によると、その計画は93年以来進められ、東京では江木保男方に、京都では稲畑勝太郎方に建設事務所が設けられた。当時の発起人は保男と稲畑を含めた45人で、そのなかには、原田、富井、高木、小林、榊原といった同窓会に集まったメンバー、さらに、田部芳、梅謙次郎、西園寺公望など、法曹界・政界に至る門下生の氏名が見られた。記念碑は南禅寺畔に建立され、その落成式が99年7月23日に挙行された<sup>163)</sup>。その集合写真には、稲畑、原田、梅、富井、高木らが写っているが、保男の姿はなかった<sup>164)</sup>。

保男は病に侵され、長い間養生の生活を強いられていたが、落成式前年の98年1月2日に43歳で死去した。ただし、死去直後には内幸町の住居がまだ普請中で<sup>165)</sup>、手狭だったために、仮葬しか行わなかった。3月になって、ようやく住居が普請落成できたので、同月19日午後1時に自宅から谷中墓地へ出棺し本葬を営むという死亡広告が、保男の長男・定男と、弟・松四郎の連名で新聞紙上に出された<sup>166)</sup>。

### おわりに

以上のとおり、本論は、江木高遠・保男兄弟に対する新事実を発見し、既成事実の因果関係を探り

160) 江木商店 [1893?]、105-128コマ。

161) デュリーは、フランス帰国後も近代日本の人材育成に尽力を注ぎ、85年に日本政府から勲四等旭日章を授与、88年にマルセイユの日本名誉領事に任命され、同地で老後を過ごした。高梨編 [1938]、123頁。同頁の「享年七十二」は、69歳の誤記と思われる。

162) 『読売新聞』、1891年11月2日、2頁。

163) 記念碑は、関西日仏学館（現・アンステイチュ・フランセ関西-京都）に現存する。

164) 高梨編 [1938]、124-125頁。同書には「十月落成式が挙行された」とあるが、『朝日新聞』、1899年7月20日、東京版、1頁によると、「明後二十二日京都南禅寺に於ける仏人列翁就理氏の開碑式」、また『読売新聞』、1899年7月22日、朝刊、4頁には、「明廿三日午前九時を以て其建碑式を挙行」とある。おそらく、高梨編の記述は、デュリーの亡くなった月が10月であり、記念碑の碑文にも「明治三十年十月」（実際の落成式は明治32年）と刻字されたために、「十月落成式」と記載したと思われる。

165) 96年6月15日、保男は内幸町の土地2筆206坪余を、三菱合資会社から月額18円78銭で賃借し始めた（三菱合資会社「貸地貸家根拠簿」明治28年11月（MA-2402）、三菱史料館蔵）。この土地に家屋が建築され始めたのは、97年9月ごろである（『朝日新聞』、1897年9月20日、東京版、4面）。

166) 『朝日新聞』、1898年3月16日、東京版、8頁。

ながら、その新たな解釈を導き出すことに努めてきた。

その結果として、高遠の場合、1870年代後半に講談会を断続的に組織したのは、留学時に獲得した米国の習慣・法律などの知識を、近代都市東京の府民に教授するためだったといえよう。講談内容が高遠の専門である法律学だけに偏重することなく、自然科学にまで至っていたのは、それだけ洋学の幅広い教養と興味深さを、一般市民にも持ってほしかったからだと思われる。それだけに、講談会の名称が3度変更されたのは、そのタイミングに合わせて、高遠の交遊関係が拡大している証左でもあった。当初は高遠・井上と慶応義塾関係者の集合体だった「鎗屋町講談会」が「江木学校講談会」へ改称されたのは、単に開催場所が変更したからだけではなく、東京大学関係者との親交が密接になったからである。その背景として、当時高遠が英語学校および予備門の教員に就任していた点が重要であった。その組織がさらに「講談会社講談会」へと発展したのは、講談対象のネットワークが、従来の慶応義塾と東京大学の関係者に加えて、かつての明六社メンバー、米国留学時から培ってきた日本法律会社関係者、官僚、ジャーナリストに至るまで拡大していったからである。それぞれの関係者は相互に交流する機会を持っていたが、これだけ幅広い人材を束ねられたのは、ひとえに高遠のファシリテーターとしての力量があつたことだと思われる。

このように、高遠は特定の集団に群れるタイプの啓蒙主義者ではなかったために、自分のプレーンを作らなかつたことが、文字通り命取りになってしまった。最期があまりに悲劇的だったために、その存在が市井の関心から消し去られる懸念もあつたが、死後100年経過したのち、「専修学校の設立者に名をつらねるべき人であった」という専修大学側の評価は、高遠に対する最大の追贈だったといえよう。

保男に関して、写真店経営者はいくまで彼の軌跡の終着点であつて、その本来の役割は別のところに存在していたと思われる。当初として、その語学力が買われた結果、殖産興業・輸出振興政策の最前線部隊に立っていたが、それとともに育まれたのは、近代欧米都市文化の日本への移植願望であつた。『郵便報知新聞』の通信員としてパリ万博の到達点を伝えたのち、東京乗合馬車会社で輸入車両の「オムニバス」を市内に走行させたり、江木写真店の一支店に過ぎなかつた新橋店に「江木塔」と呼称されるモニュメントを築いたりするあたりには、高遠とデュリーの影響を強く受け、万博に魅せられた保男による東京の「パリ化」が部分的に具現化されたといつてよい。実際、85年2月に開かれた第1回市区改正審査会では、内務大書記官の山崎直胤が、パリをモデルとした東京の改造計画の実現を謳っていた<sup>167)</sup>。結果として、乗合馬車会社の経営が失敗し、写真店の経営が軌道に乗つたことで、保男は写真店主という肩書きを得ることに成功したが、彼自身の「パリ化」はもう一段階上がったところにあつたのかもしれない。彼が晩年に三菱から賃借した内幸町の地所203坪余の土地は、単に家族の居住地として利用するには広すぎるだけに、外堀を挟んで東隣に位置する「江木塔」の如く、その夢を何らかの形で叶えるための空間だったようにも思える。そういう意味で、43年間の人生は保男にとって少し短いものだったと、残念でならない。

167) 藤森 [1990]、162-171頁。

## 参考文献

- 飯田史也 [1998] 『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』 風間書房
- 磯ヶ谷紫江 [1927] 『墓碑史蹟研究』 第7巻、後苑荘
- 梅溪昇 [1965] 『お雇い外国人』 日本経済新聞社
- 丑木幸男 [1999] 「直輸出蚕種業者のミラノ通信」、『史料館紀要』 第30号
- 江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会編 [1985] 『江木五十嵐写真店百年の歩み』 五十嵐写真店
- 江木商店 [1893?] 『東京景色写真版』 江木商店
- 老川慶喜 [1980] 「明治中期銚子港における鉄道建設」、『経営史学』 第15巻第2号
- 大久保利夫 [1890] 『衆議院議員候補者列伝』 第2編、六法館
- 関西大学創立七十年史編集委員会編 [1956] 『関西大学七十年史』 関西大学
- 木山実 [2009] 『近代日本と三井物産』 ミネルヴァ書房
- 京都大学文学部国史研究室編 [1993] 『吉田清成関係文書』 1 (書翰編1)、思文閣出版
- 京都府編 [1974] 『京都府誌』 上巻 (復刻版)、名著出版
- 京都府教育会編 [1940] 『京都府教育史』 上、京都府教育会
- 久保田哲 [2014] 『元老院の研究』 慶応義塾大学出版会
- 黒屋直房 [1987] 『中津藩士』 国書刊行会 (原本1940年発行)
- 群馬県史編さん委員会編 [1985] 『群馬県史』 資料編23 (近代現代7)、群馬県
- 交詢社編 [1983] 『交詢社百年史』 交詢社
- 越山鬼城 [1900] 『近畿弁護士評伝』 潜竜館
- 塩崎智 [2007ab, 2008] 「幕末維新在ブルックリン (NY州) 日本人留学生関連資料集成及び考察 (1) ~ (3)」、『拓殖大学 語学研究』 第114号、第116号、第117号
- 瀬川光行 [1893] 『商海英傑伝』 第9篇、富山房
- 専修大学編 [1981] 『専修大学百年史』 上巻、専修大学出版局
- 祖田修 [1987] 『前田正名』 新装版、吉川弘文館
- 高山道男編訳 [1978] 『フルベッキ書簡集』 新教出版社
- 高梨光司編 [1938] 『稲畑勝太郎君伝』 稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記刊行会
- 土浦市史編さん委員会編 [1975] 『土浦市史』 土浦市
- 東京外国語大学史編纂委員会編 [1999] 『東京外国語大学百年史』 東京外国語大学
- 東京大学史料編纂所編 [1956ab] 『江木鰐水日記』 上下、岩波書店
- 東京大学百年史編集委員会編 [1984, 1987] 『東京大学百年史』 通史1、部局史2、東京大学
- 東京都編 [1983, 1990] 『東京市史稿』 市街編第74、市街篇第81、東京都
- 東京都交通局 [2012] 『東京都交通局100年史』 東京都交通局
- 遠山景澄編 [1907] 『京浜実業家名鑑』 京浜実業新報社
- 富岡多恵子 [2000] 『中勘助の恋』 平凡社

- 中村尚武 [1889] 『房総名士叢伝』 前編、中村尚武
- 西澤直子 [1997] 「小幡甚三郎のアメリカ留学」、『近代日本研究』 第14巻
- 日本写真協会編 [1976] 『日本写真史年表』 講談社
- 布川周二（渋沢秀雄監修）[1966] 『五十嵐与七物語』 叢文社
- 野田醤油株式会社社史編纂室 [1955] 『野田醤油株式会社三十五年史』 野田醤油株式会社
- 鳩山春子編 [1929] 『鳩山の一生』 鳩山春子
- 花房吉太郎・山本源太編 [1892] 『日本博士全伝』 博文館
- 平野繁臣 [1999] 『国際博覧会歴史事典』 内山工房
- 広島県編 [1976, 1984] 『広島県史』 近世資料編Ⅱ、通史Ⅳ近世2、広島県
- 藤森照信 [1990] 『明治の東京計画』 岩波書店
- 報知新聞社 [1941] 『報知七十年』 報知新聞社
- 干河岸貫一編 [1900] 『近世百傑伝』 本編、博文館
- 牧野逸馬 [1890] 『小林樟雄君之伝』 文友館
- 松岡讓編 [1929] 『漱石写真帖』 第一書房
- 松崎欣一 [1998] 『三田演説会と慶応義塾系演説会』 慶応義塾大学出版会
- 三井文庫編 [1980] 『三井事業史』 本篇第2巻、三井文庫
- 三宅雪嶺 [1950] 『同時代史』 第2巻、岩波書店
- 宮武外骨編 [1926] 『明治奇聞』 第6編、半狂堂
- モース, E. S. (石川欣一訳) [1971] 『日本その日その日』 3、平凡社
- 安岡昭男 [2012] 『副島種臣』、吉川弘文館
- 矢野龍溪代表 [1979] 『明治新聞人文学集』 (明治文学全集91)、筑摩書房
- 山口静一 [1982] 『フェノロサ』 上巻、三省堂
- 山崎有信 [1981] 『豊前人物志』 国書刊行会 (原本1939年発行)
- 山本弘文編 [1986] 『交通・運輸の発達と技術革新』 国際連合大学

〔九州大学大学院経済学研究院 准教授〕